
IS 歪んだ世界

男の娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 歪んだ世界

【Nコード】

N5703Z

【作者名】

男の娘

【あらすじ】

死ぬはずではなかったのに死んでしまった？

神様がお詫びにISの世界に転生させてくれるらしい。

しかし、男ではなく女？

じゃあ、男にしてと頼んだら、男と女の体か宿る二重人格ならぬ二重人格になった。

しかし、転生した世界はぼくがいることにより歪んでしまった。

ぼくのせいで歪みが出来たならばくがその歪みを正すまで。

作者の処女作です、至らない点もあるとおもいますが未永く見守っ

てくねると幸いです。

プロローグ（前書き）

ひよんな事から始めた作品ですが、どうか見てくれると嬉しいです。

では、IS 歪んだ世界どうぞ。

プロローグ

プロローグ

僕は起きると真っ白な空間にいた

「あれ、ここどこだ。」

「ここは、あの世とこの世の狭間だよ。」

なるほど、ここはあの世とこの世の狭間だそうです、ってどうしてそんなところに僕はいるの。

「死んだから。」

えー、僕は死んだのそんな〜。

「イヤーメンゴメンゴ、私たちの手違いで。」

えー、ちよつとどうゆうことですか、てか貴女誰ですか？

「あ〜、そう言えば自己紹介がまだだったね。私は神様だ。」

へー神様か〜、って神様。

「うん、神様」

あれ、僕今まで声に出してなかったよな。なんで神様はわかったんだ。

「だって神様ですから」

神様なんでもありなのかよ、てか手違いって何。

「実はかくかくシカジカで」

つまり僕は死ぬはずじゃなかったのに、他の人の代わりに死んだと。

「そうゆうこと、お詫びていっては何んだけど、新たな人生を歩ませてもらおう。」

新たな人生？

「そう、君の好きな小説で言う転生ってやつ。」
「はあ」

「で、何か能力が欲しいとかない。」

その前にどこの世界に転生するんですか？

「あ〜ISの世界だよ。」

ISかあれ好きなんだよね。

「君を転生させるとちよつと歪みが起きるけど何とかしてね。あと、転生すると君女だから」

え、女なのじゃあ男にしてください。

「それが出来ないんだよね。じゃあ二重人格ならぬ二重体格はどう。」

二重体格？

「細かいこと気にしない。他にほしい能力は？」

じゃあ剣術と銃と武術の能力を上げてあと運動神経とISの操縦技術と作る技術を

「あいよ、あとはISを決めてね。」

ISは近接主体の状況によって変形する、ストライクみたいなの、あとAIを乗せて

「あいよ」

あと篠ノ之家の子供がいいな

「生まれは無理だけど拾って貰うことなら出来るよ」

じゃあそれで

「わかったよ、じゃあ良い人生を。」

さようなら神様

「さようなら」

プロローグ（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

次回 第一話

「やあ、元気かな。」

拾われた結歌

「元気はいいよ、ははは」

狂った天才

次回

「出会いと狂いとあらわる天災」

お楽しみに

第一話 出会（前書き）

第一話です

第一話 出会

あれこどこ、

「オギヤーオギヤー」

あー、そう言えば私転生したんだった。

どうもわたしは篠ノ之結歌しののゆいかです。

転生して路上で泣いていたところ東お姉ちゃんに拾われて篠ノ之家の子供として育てられることになりました。

「オギヤー」

隣にいるのは妹の篝ちゃんです。

わたしが拾われた1ヶ月後に生まれました。

この篠ノ之家の父は剣道の師範代だそうです。

神様に剣道のスキル貰つといて良かったー。

大きくなつたらお父さんに剣道を教えてもらうんだ。

楽しみ。

ガチャガチャガチャピン

この音は東お姉ちゃんが来たようです。

「やあやあ元気かなお二人さん」

「「ダアツダアツ」」

「元気のようだね元気はいいよはっはっは」

高笑いしてどっか行きました。何したかったんだろう？

お姉ちゃんは天才らしいんですが、わたしには変人にしか見えません。

こうして私の篠ノ之家での生活が始まった。

第一話終わり

第一話 出会（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

次回 第二話

「なにこの数字列」

始まる開発

「これわかるのゆいちゃん」

ばれる才能

次回

「睡眠と理科とIS開発」

お楽しみに

第二話 開発（前書き）

第二話です。

とじと

第二話 開発

どうも結歌です。

わたしは小学生になりました。

今は篠ノ之道場ど剣道の稽古をしています。

道場って言っても門下生が三人しかいないんですがね。

三人の内二人は分かりますよね、もちろんわたしと篝ちゃんです。

もう一人は原作の主人公キング・オブ唐変木の織斑 一夏君です。

お姉さんの影響で剣道を始めたそうです。

さすがシスコンですね。

「お姉ちゃんもうそろそろ終わりにしよ。」

あ、もうそろそろ千冬さんが迎えに来る頃ですね。

ちなみにいまお父さんは用事で出掛けているので時間が来たら終わらせてと頼まりました。

「そうですね。もうそろそろ終わりにしますか。」

ちなみにわたしは、剣の才能を神様に貰ったのでこの中で一番強いです。

「ふう、疲れたぜ。」

「一夏あ」

ちようど良かったですね。

千冬さんが迎えに来ました。

「ちようど良かったですね。今終わったところです。」

「そうか。よし一夏帰るぞ。二人ともありがとな。」

「はい。お疲れ様でした一夏君。」

「バイバイ一夏」

「おう、じゃあな篝、結歌さん。」

何で篝ちゃんは呼び捨てなのわたしはさん付けなの。まっいいか。

「篝ちゃん帰ろうか」

「うん」

相変わらず篝ちゃんは可愛いな。

「「「ただいま。」」」

「お帰り、篝ちゃん、ゆいちゃん。」

「ただいま姉さん」

「ただいま、お姉ちゃん。お姉ちゃんまた部屋にこもってたでしょ。」

「

「うんまあね、あはは」

お姉ちゃんはここんとこずっとこんなんです。

学校から帰って来たらずっと部屋に居ます。

「なにやっつてんの」

「二人にはまだ早いよ」

早いってことはたぶんISのことでしょうね。

「そうなんだちゃんと寝てね。」

「わかってるよ。」

わかってるんでしょつか、目下にすごい隈が出来てます。

「じゃあ、ご飯できたら呼ぶから。」

「うん、分かったよ。」

「篝ちゃん行こう。」

「うん。」

「バイバイ。」

今日はお母さんにお料理を教えてくださいます。

「「お母さん」」

「お帰り二人とも、じゃあ手洗って来てね。」

お母さんは優しい人です。

それに料理も上手です。わたしもこんな人になりたいです。

「わかった、お姉ちゃんいこ。」

「うん。」

30分後

「ゆいちゃん、ご飯できたから、お姉ちゃん呼んできて。」

「はい。」

私は手を拭いてお姉ちゃんの部屋に向かいます。ちなみにお姉ちゃんの部屋はわたしの部屋の隣です。

コンコン

「お姉ちゃん、ご飯できたよ。お姉ちゃんー。」

返事かない、寝てるのかな？

「お姉ちゃん入るよ。」

ガラガラ

お姉ちゃんの部屋は薄暗く本やら何やらで散らかってます。パソコンの前にお姉ちゃんはいました。

「お姉ちゃん。」

何かに真剣になっててわたしの声に気づいてないようです。パソコンを覗くと何かの数字の列があります。

「これは何かのプログラム？でもいろいろ間違えてる。」

「ツツ！？ゆいちゃんこれ分かるの？」

「え、あ、うん少しだけ。」

これはISのプログラム？神様にISの技術もらって良かった。

「本当だ。……すごいねゆいちゃん！」

まあ神様のおかげだけ。

ああ、お姉ちゃんにナデナデされてる

「そうかなあ、えへへ。」

「そうだよ。」

「あ、それよりご飯だよ。いこつ。」

「うん。」

次の日からISの作成を手伝わされることになるのです。

第二話 開発（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

次回 第三話

「おーい、一夏〜」

新たなる出会い

「お姉ちゃんこういう本持ってるよ」

知らされる真実

次回

「友情と真実と新たな出会い」

お楽しみに

第三話 友情（前書き）

短いですが第三話です。
どうぞ

第三話 友情

おはようございます。

結歌です。

わたしはいま箒ちゃんと一緒に登校中です。

あ、一夏君です。

「おはよう一夏。」

「おはようございます一夏君。」

「おう、二人ともおはよう。」

二学期になり学校にも慣れて来ました。

こんなやりとりも毎日のことです。

「おーい、一夏あ。」

誰かがこつちに向かって走って来ます。

あれ、この人は確か同じクラスの佐藤優斗君だっけ。

「お、おはよう優斗。」

「おはよう一夏。おはよう篠ノ之さんたち。」

「「おはよう」

「一夏君いつの間にか仲良くなったの？」

「いやさー、優斗が面白い本持ってて。」

はあ、一夏って本当単純だよな。

「一夏これ昨日の続き。」

「おう、ありがとう。」

何々、あ、これガンダムの小説じゃん。

アニメで見たです。

「優斗君、これアニメでやってたよね？」

「篠ノ之さん知ってるんですか？」

「うん少しだけ。」

やっぱりやってたんだ。

面白かったなー。

確か主人公はキラ・ヤマトだっけ。

「知ってる人がいたんだね。」

今度ガンダム創るか。

「お姉ちゃんのお部屋にそういう本いっぱいあるよ。」
なに、何故知っているんだあ箒ちゃん。

あれは本棚の一番奥において前に本を二重においたはずなのに。

「何で箒ちゃん知ってるのかな？」

「お姉ちゃんが読んでるの見たから。」

「うう、何で知ってるの知ってても言わないでよ。」

「ご、ごめんねお姉ちゃん泣かないで。」

泣いてないもん。

「じゃあ手繋いでくれたら許してあげる。」

「うん、はい。」

あー箒ちゃんの手柔らかかいし暖かい。

「えへへ。」

「お姉ちゃん許してね。」

「うん。あ、優斗君ってスタイル良いよね何かスポーツやってるの？」

「うん、アーチェリーを少しね。」

へーアーチェリーかカッコいいな。

キンコンカンカンコン

「大変チャイムだ、早くいこ。」

これが佐藤優斗との出会いであった。

第三話終わり

第三話 友情（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

次回 第四話

「こいつがリボンしてたらおかしいかよ」

怒る一夏

「君たちはどんな声でなくかな」

キレル結歌

「よろしくね」

新たな友達

次回

「怒りて友達と転校生」

お楽しみに

第四話 友達（前書き）

第四話です。オリキャラが出てきます。では、どうぞ

第四話 友達

時は流れ二年生になりました。

「今日は、転校生を紹介します。」

転校生が入ってくるのとクラスがいきなり騒がしくなりました。

わあ、瞳がアリアみたい。

「転校生の夜長桃華よながももかです。よろしくお願いします。」

転校生こと桃華ちゃんはきちんと一礼して席につきました。

黒髪にアリアカラーの瞳可愛いな。

「では、授業を始めます。」

ハアーまたつまらない授業が始まります。

ISの理論を作りますか。

ポッパー

休み時間

「ねえ、君どこ生まれ。」

「え、あ。」

「どんなことが好き？」

「あ、えーと。」

「黒髪に赤い瞳、ハアハア。」

「ひっ、」

休み時間になると、クラスの人たちは、一斉に桃華ちゃんに質問しています。

てか最後の人は質問じゃないでしょう。

「あーゆうのってバカだね。一人一人言わなきゃわかんないのにな。」

「そうだねー。」

まあどうでもいいや。

さて続きやりますか。

「お姉ちゃんまたそれ？授業中もやってたでしょ。」

おっ、さすが箒ちゃんよくみてるな。

「うん、そうだよ。」

「なあ、なんだそれ。」

「僕も知りたいな。」

「私も。姉さんとなんかやってるのと関係あるの?」

「まだ三人には、早いよ。」

そう三人には、早すぎる。

「なんだよそれ。まあいいや。」

「そういえば今日はどうする? 皆暇でしょ。」

今日は剣道の稽古もないし暇だな。

「じゃあ一夏の家行く?」

「いいぜ、俺んちな。」

「うん、じゃあ明日は休日だし、泊まるかな。」

千冬さんの部屋も掃除しなきゃいけないしね。

「いいぜ、じゃあ一緒にご飯作るうぜ。」

よし、なに作るうかな。

「うん、じゃあ材料買っとくね。」

「ああ。」

「箒ちゃんも泊まる?」

「うん。」

よし、決まったね。

私は午後もISの理論をたててました。

1ヶ月後

「おい、外人なんか言えよ。」

「おい、男女?。今日は木刀持ってないのかよ。」

「日本人です。」

「……竹刀だ。」

「へっへ。お前みたいな男女には武器がお似合いだよな。」

「……。」

「お前目の色変だもんな。」「しゃべり方変だもんな。」

あくまたやってるよあいつら、目の色ならわたしも一緒だろうってーの。

まあ、言ってきたても、泣かすから無駄だろうな。

「やーい外人。」

「やーいやーい男女ー。」

あーうつざいなー、掃除してんのに邪魔だなー。

「…うつせいなあ。テメーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ。ああ？」

「…そうだよ、カスがバカはとつと消える。」

一夏君も怒っている様だ、まあ私も限界寸前だけど。

「なんだよ織斑お前こいつの味方かよ。」

「へっへっ、この男女が好きなのか？」

「お前も外人のくせになめんなよ。」

「頭がちよつといいからつて調子にのんなよ。」

ハアー、本当こうゆうバカは嫌いだ、て言うかテメーらとわたしの頭脳は月とスッポンぐらいの差があるだろが。

「邪魔なんだよ、掃除の邪魔、どっか行けよ、うぜえ。」

「そうだよ、どっか行け、もしくは死ぬ。」

「へっ、真面目に掃除なんかしてよー、バツカじゃねーの おわっ！？」

「外人がテメーが死ぬ うお！？」

いきなり箒ちゃんと桃華ちゃんが男子の胸ぐらを掴みました。

箒ちゃんは一夏君が好きだから怒っているんだろうけど、桃華ちゃんは何で怒ってるんだろ。

まさかわたしのため、そうだったら嬉しいな。

「真面目にすることの何がバカだ？お前らのような輩よりは、はるかにましだ。」

「私たちは外人じゃない、あなた達が消えて。」

「な、なんだよ……何ムキになってんだよ。離せよ。」

「ざけてんじゃねえよ、離せよ。」

あーあ、男子二人がもがいています。篝ちゃんをバカにするのがいけないんだよ。桃華ちゃんは力強いな。

「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら夫婦なんだよ。知ってるんだぜ俺、お前から朝からイチャイチャしてるだろ。」

「こいつら、女のくせに女が好きなんだぜ。こいつ、この前男女に抱きついてたぜ。」

「外人なんて授業中ずつと篠ノ之のこと見つめてたぜ。」

うわっ、バツカだな、女が好きって確かに男よりは好きだけど、妹に抱きついて何が悪いんだよ。て言うか桃華ちゃんがわたしを見てたって嬉しいな。

「だよな。このなんか、こいつリボンしてたもんな！男女のくせによー。笑つちまぶごっ！？」

「外人どものくせに俺らと同じ髪の色してんじゃねえよ、テメーらにはハゲがくべっ！？」マジでキレました。

外人だから黒髪がだめとか法律にあんのってーの、だいたい外人じゃないし、乙女にハゲが似合うとか論外だろ。殺す。

一夏もあれだけ言われたらねー。

「笑う？何が面白かったって？あいつがリボンしてたらおかしいかよ。すげえ似合ってただろうが。ああ？なんとか言えよボケナス。」

「外人じゃねえって言うてんのよ。だいたいテメーら下等生物が真似したんだらうが。この子が黒髪で何が悪い、すごく可愛いだろうがクズが殺すぞ。」

「お、お前らっ！先生に言うからな！」

「勝手に言えよクソ野郎。その前にお前らは全員ぶん殴る。」

「面白い言えるなら言えよ。まあ生きてるかわかんないがな。さて、君たちはどんな声でなくのかな。」

やっぱ面白いのはは。

10分ぐらいしてから先生達が来ました。

一夏は三人に圧勝、わたしは三人をフルボッコにしました。

そのうち二人は骨折したそうです。

そのせいでわたしは一週間謹慎処分です。

まあお姉ちゃんのおかげでそれだけですみました。

処分明け

「ごめんなさい、私のせいで。」

「いいよ、だいたいわたしが怒って殺っただけだし。」（漢字間違
いではない）

「で、でも」

あーめんどくさい。

「じゃあ友達になってそれでいいよね。」

「えっ」

「友達は助けるのが普通でしょ？」

「うん。」

「よろしくね。桃華ちゃん」

「はい、よろしく。結歌ちゃん。」

こうして私は桃華ちゃんと友達になった

第四話 友達（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

予告

「私の子を否定するなんて」
起こる束それによりとある事件が起こるそして別れる友たち。

第五話

「バカと怒りと白騎士事件」
お楽しみに

第五話 事件（前書き）

第五話白騎士事件です。

千冬の戦闘？シーンはありますが第五話とつぞ

第五話 事件

どうも、結歌です。

わたしは四年生ですが、もうすぐ五年生です。

そして、お姉ちゃんとISの開発を始めてはや四年、ついにISが完成しました。

そして今日は発表の日です。

といってもわたしは学校なんで行けないうすけどね。

シヨボーン

でも、お姉ちゃんが、

「製作者のところへゆいちゃんの名前も入れといたからだいじょうぶいぶい。」

って言うてました。

ISが認められたらわたしテレビに出るのかなー？

ってISは、認められず、お姉ちゃんが怒って白騎士事件起こすんじゃない？

ってことはわたしもお尋ね者ヒエー。

まあいいか。

お姉ちゃんについて行けば安心だし。

でもそうしたら篝ちゃんや一夏君千冬さんにお父さんお母さんに会えなくなるのかー。

あれ、そう言えば神様に男にしてって頼んだら、

「じゃあ二重人格ならぬ二重体格にしてあげる。」

って言われなかったけ？

って言うか二重体格って何？

二重人格は二つの人格でことだから、二つの体格？

つまり、男と女の体、うーんどういうこと？

まあお姉ちゃんにでもたーのも。

今は授業に集中しよ。

ポッパ―

「お姉ちゃんただいま。」

あれから時間がたち、わたしは家に帰ってきました。

「お〜か〜え〜り〜」

うわ、なんだかすごく怖いです。

どうせISが認められず、お姉ちゃんは怒っているんだろうな。

「ど、どうしたの、お姉ちゃん。」

「あのクズども、私達の子を否定しやがって。」

まあ仕方ないだろうな。だって十五歳と十歳の女の子に今までの兵器を上回る性能を持った、ものを造られたんだから抵抗するよね。

「よし、あれをやるう。」

「あれって、もしかしてあれ？」

「うんあれ！」

あれとは、私が事前にISが認められなかった時に、世界にISを認めさせる作戦、ケースE579のこと、そう白騎士事件です。

「うふふ、これで世界は私達ね子を認めざるおえない。けっけっけ。」

「

お姉ちゃん怖いです。

「はあ、仕方ないな、じゃあ、千冬さん呼んで来るから。」

「うん、よろしく。」

ポッパ―

「なんだ東。」

わたしは千冬さんと呼んで来ました。

ふう、疲れた。

「やあ、ちーちゃん良く来てくれたね。」

「何で呼んだと聞いているんだ。いま、一夏と遊んでいたとついうのに。」

「ここからはわたしは必要ないので、白騎士の最終調整でもしてませんか。」

「うーん、ここをこうして、っと。」

「はあ？何を言っているんだお前は。」

「まあまあそう言わずに。」

「あ、終わっちゃった。」

「ラノベでも読んでますか。」

「はあ。お前バカか？」

「まあ良いではないか良いではないか。」

「あー、ガンダムUC面白い。」

「はー分かった、手伝えばいいんだろ。」

「やったね、ゆいちゃん白騎士調整して。」

「おっ、終わったか。」

「もう、終わってる。」

「さすがゆいちゃん。」

「ハッキングの用意してっと。」

「じゃあちーちゃん、装着してね。ヒューティングとフォーマット
すませるよ。」

ポッパ

「ふう、完了っと、どうちーちゃん。」

「ああ、さすがだな束。私の思うように動く。」

「そうでしょやったね、ブイブイ。」
「さっそくつですいませんが。行けますか千冬さん。」
「ああ、行けるぞ。」
「じゃあ。」
「うん、そうだね。」
「ああ、織斑千冬、白騎士いくぞ。」
「じゃあ、お姉ちゃん、いくよ、」
「うん。」
「「スイッチオン」」

ポチ

よし、わたしの仕事はもう終わり。
じゃあ逃げる準備でもしますか。

篝ちゃんの部屋にお別れの手紙をおいて。

台所にはお母さんとお父さんへ。

あと、本棚を量子化して、量産しておいたコアを置いて、この家ともおさらばか、色々あったな。あっ、ちょうどよく千冬さんが帰ってきました。

「お疲れちーちゃん。」

「ああ、」

わたしは千冬さんから白騎士を返してもらって、解体します。

あと、コアを初期化して。

「終わったよ、お姉ちゃん。」

「うん、分かったよ、じゃあお別れだねちーちゃん。」

「シリアス風に言うな、お前はいつでもどこでも、「ちーちゃん」
っていつてくるだろ。」

さすが千冬さん、お姉ちゃんのことを分かっています。

「じゃあ、一旦バイバイちーちゃん。」

「ああ」

さて何処に行きますかね。

少しの間はアパートかな。

「では、さようなら千冬さん。あと、一夏にまた会いに来るって、伝えといて下さい。」

「ああ、分かった、束を頼んだ」

「はい。」

「ひどいよちーちゃん普通逆じゃないの。」

まあ、ほつといて。

こうしてわたし達の逃走生活が始まった。

第五話 終わり

第五話 事件（後書き）

誤字脱字感想とうありましたらよろしくお願いします。

次回 第六話

「本当に男の子の体があったよ。」

見つかる真実

「これはISS?」

見つかるISS

「/ / /」

見られる裸

次回

「男と女とチエーンジ君」

お楽しみに

第六話 男子（前書き）

今日は大晦日ですね。

どうでもいいけど

第六話です。どうぞ

第六話 男子

どうも結歌です。

今はISを発表してから一ヶ月。

全国の小学校では春休みが始まるころです。

そんな日でもわたし達は、大忙しです。

「お姉ちゃん、撃たれるよ〜」

「はっはっは、さすがの私でも困ったな。移動式ラボをミサイル型にしたのがいけなかつたかな？」

「だから言っただじゃん絶対ダメだって言っただじゃん！そんなことよ
り、逃げなきゃ。」

「そうだね。」

大忙しです。

ポッパー

「はあ〜、なんとか逃げられた。けど、ミサイル型は無しだよ。」

「え〜、ブウブウ。仕方ないな〜、じゃあ人参は？」

う〜ん、まあそれならいいよね。

「いいよ。」

「え〜、いいのって、えっ！いいの？」

何でそんなに驚くの？

別に人参なら撃たれないからいいじゃん。

「別にいいよ。」

「あっ、そうですか。（てきとうに言っただつもりなのに、まあいい
か。）」

それにしても何もないと暇だな〜。

るくに買い物にも行けないし。

「あー、暇だな〜。お姉ちゃん学校行きたい。」

「それは無理なんじゃない。」

やっぱり無理か。

あつ、そうだ。

「お姉ちゃん、男の子になれば行けるかな？」

「えっ、男の子？」

「そう、わたし二重人格ならぬ二重体格なの。」

「えっ、二重体格？」

「そう、二重人格は、二つの人格でしょ。わたしのは男の子と女の子の体があるの。」

わたしもよくわからないけど。

「じゃあ、男の子になつて。」

「えっ、う。わたし体かえられないの。」

「え、じゃあ行けないじゃん。」

「だから何かつくつてお願い。」

「グハツ！（上目遣い）お願いは禁止だよ。」

えっ、お姉ちゃんが吐血した。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「うん大丈夫だから待つて。」

二日後

あれからお姉ちゃんに色々本当色々、調べられて、本当に男の子体があることがわかりました。

今は、お姉ちゃんに女の子と男の子の体が入れ替わる装置を作つてもらつてます。

「ふう、ゆいちゃんできたよ。」

おっ、できたようです。楽しみ。

テケテケ。

どれどれ、うわっ、なにこれ首輪？

「これは、ゆいちゃんの意識まあ、ぶつちやけ言つと魂？を一回この機械に取り込んで、その間に体をチェンジしてその体に、さっき取り込んだ魂？を入れる装置だよ。」

うわっ、すごいな。

やっぱり天才（天災）だ。

「うわっ、すごいね。」

「そうだね、すごいんだよ。でも、使つと両方の体が成長遅れるから。」

え、それはやだな。

でもみんなと会えるならいいか。

元から小さいし、胸はどうせ小さいんだろうし。

「いいよ。元から小さいし。ありがとねお姉ちゃん。」

「うん。」

よし、転校の手続きしなきゃ。

まず、戸籍を偽装作成して。

ポッパー

よし、終わった。

あ、そういえばどうやって学校に行くんだろう？

「ねえ、お姉ちゃん。学校までどうするの？」

「前買った（奪い取った）一軒家にワープ装置置いといたから、そのワープ装置に乗れば行けるよ。」

うわっ、すごい用意周到だな。

でも、これで学校に行ける。

「ありがとね、お姉ちゃん。」

「うん、他にも困ったら、お姉ちゃんに任せなさい。」

「じゃあ、片付けして。」

「えっ、それはできないかな？」

まあ、いいや。

よし、一回使ってみますか。

どう使うんだ？

あゝここを回すのか。よし。

この装着何か奴隷の首輪みたい。

「お姉ちゃん、回すよ。」

「うん。」

カチ

ダイヤルみたいなのを回すと、わたしの体は光に包まれ、光が収まると、

「うっ、うん、成功かな、あっ……」

うん、成功らしい。

あれ？お姉ちゃんの顔が赤くなってる？

「どうしたの？」

「あっ！あっ！あっ！」

お姉ちゃんは、あっあ言いながら、わた、ちがかった、ぼくの体を指差しています。

ぼくの体に何かあったのかな？

そう思いぼくの体を見ます。

「なっ、なんで裸なの？」

お姉ちゃんが赤くなつたのは、ぼくが裸だったからか。

それにしても、髪長いし、声高いし、鏡見ると女顔だし、本当女の子みたい。

てか、体白いなー。

足もお腹も腕も、つてええええ！

左腕に、「これ ゾビです？」の、ユのガントレットみたいななのついてるし。

「お姉ちゃん、なにこれ。」

「うん、調べてみようか？」

「うん。」

ポッパ

あれから色々調べた結果。

このガントレットは、ISだそうです。

しかも、今の技術では、ありえない機能ばかり。ということは、これが神様が言ってたISか。

しかし、ガントレット邪魔だな。

これ消したりできないのかな。

無理だよな。

って、うわっ、消えた。

でもつけてる感覚はある、ってことはステルスか。

「すごいね、このIS。でもなんでこんなの持ってるの？」
うっ。

「さあ。」

「ふーん、まあいつか。」

ふう、さすがに神様にもらったとか言えないよね。

「それより、なんか服ないの。恥ずかしいよ。」

「女の子用しかないよ。」

まあ、着れるならいいや。

今度買いにいこ。

「お姉ちゃん、ISも一緒に移動するようにしといて。」

「うん、わかったよ。」

これで学校に行ける。

一夏や優斗、千冬さんに桃華に会える。

そういえば、五年生になるのか。

五年って言えば、鈴ちゃんが転校してくるな。

仲良くなれるかな？

楽しみ。

こうして、ぼくの新たな生活が始まったのであった。

第六話 終わり

第六話 男子（後書き）

誤字、脱字、感想、アドバイスとつありましたらよろしく願います。

では、よいお年を。

第七話 転校（前書き）

第七話 鈴が登場します。

第七話 転校

四月、新たなる始まりの月。
どうも、結渡です。

ちなみに、名字は夢音です。

またちなみに、人の夢で届くような音、という意味です。

クラスは情報操作して一夏と同じクラスにしてみました。

優斗は……隣のクラスか。まあいいや。

あつ、鈴ちゃんだ、挨拶でもしとこうかな。

「ハアハア、二人ともおはようございます、私は二人が入るクラスの担任の、緒方です。よろしくね。」

また、緒方先生担任か。ちなみに、緒方先生は、1、2、3、4年と担任です。

「よろしくお願いします。」

「よ、よろしくおねがいシマス。」

鈴ちゃん、まだ日本語になれてないから、噛んじゃってる。

「結渡君、^{ファン}鳳さんはまだ日本に来たばかりで、日本語がよくわからないから仲良くしてあげてね。」

本当、優しい先生だな。

「はい、」

「ありがとう。あつ、もう教室だね。呼んだら入ってね。」

「はい。」

先生は教室に入っていました。

さあ、挨拶でもしますか。

「^{ファン}鳳 ^{リンイン}鈴音さんでっあってるよね、ぼくは夢音 結渡、よろしくね。」

「よ、よろしく。」

「一応中国語話せるから、気軽に話しかけてね。」

「ありがとう。」

「どうぞ、入ってきて。」

「呼ばれたね、行こう鈴音さん。」

「鈴、」

「え？」

「鈴でいい。名前、呼びにくい。」

「そう、じゃあ行こうか、鈴ちゃん。」

「うん。」

ガラガラ

さて、一夏は気がつくかな？

「失礼します。」

あれ、一夏した向いてる。

つまんない。

「じゃあ、自己紹介して。」

「はい。」

あれ、一夏が反応した。まあ、声同じだし。

「唯火学校から転校してきました。夢音 結渡ですよろしく。あっ、

ちなみに、女の子ではなく、男の子なので、間違えないください

ね。」

ガタツ

お、一夏が驚いてる。

ちよつとからかってみますかな。

「一夏君、自己紹介の途中に立つちゃダメだよ。」

「え、あっ、ああ。」

ちつ、素直に座りやがった、つまんない。

「え、一夏の友達？」

他が引つ掛かりやがったか。

「違うよ、最初ってほとんど名前順で座ってるでしょ。だから、配

られたクラス分けの紙で見てね。」

「スゲー。」

実際には知ってるんだけどね。

まあ、できるけど。

「ハイハイ、次、凰さんよろしくね。」

鈴ちゃん大丈夫かな？

「フア、凰ファン 鈴音リンインデス。日本に来たばっかなので、日本語よくわかんないケド、よ、よろしくねお願いします。」

「あ、話すときはゆっくり話してあげてね。」

「じゃあ二人は空いてる席に座ってね。」

ぼくは、桃華ちゃんの隣じゃん。

あ、一夏こつち見てる、まばたき信号で、

「後で話さく」

と、

「結歌ちゃんよろしくね。」

「気づいてたんだ。でも、今は結渡だよ。」

「じゃあ、よろしくね。」

「うん。」

ポッパ―

あれから時間がたち、ぼくは今、男子トイレにいます。

「今までどこいった、何で男なんだよ。てか、唯火学校ってなんだよ。」

あー、うるさいうるさい。

答えてやるから。

「最初のから教えるよ。まず、ISのニューズは見た？」

「ああ、束さんが作ったやつだろ。」

ズルツ、何でそこまで見ててわたしの名前出ないの。

「ISの製作者はお姉ちゃんとわたしの。」

まったく、本当バカだな。

「へーって、うそ。えっ、お前がIS作ったのか。」

「しー、あんまり大きな声で言わないで、だからわたしも指名手配されてるの。だから逃げたの。」

「そうだったのか。」

ふう、疲れた。

まあいい次だ次。

「で、男なのは、女だと指名手配されてるから男なら大丈夫だろうってこと。」

「へー、まあそれほど変わってないけどな。」

「うっさいなー」

「一番気にしてること。」

「それより、何で男になれんだよ。」

あーめんどくさい。

「これこれ」

ぼくはチエーンジ君をさす。

「それがなんだ？」

は、何でわかんないの？

話聞いてればわかるでしょ。

「これが、女と男を変える装置なんだよ。」

「は、なるほど。」

やっとわかったか、疲れた。

「それなら、口調変えろよ。」

それもそうだな。

「わかった、精進する。」

「おう。」

「そして、唯火学校は、そっちのほうに気づきやすくなって思っ
て。」

「なんだそれ。」

「へー、一組の転校生って、篠ノ之さんだったんだ。」

えっ、今の声は、優斗？

「優斗、何でいるんだよ。」

「いちゃ、いけないかな？」

いや、そういうわけじゃないけど。

「友達なんだし、良いんじゃないかな。だいたい、見たらわかるよ。」

それもそうだな。

「じゃあ、他の人にはぼくの事内緒だからな。」

「わかったよ。」

キーンコーンカーンコーン

「チャイムだ、戻ろうぜ。」

そうだな戻るか。

こうしてぼくの学校生活は始まった。

第七話 終わり

第七話 転校（後書き）

誤字脱字感想アドバイスなどありましたらよろしく願います。

次回 第八話

「なんで女子の制服!?!」
すり替えられた制服

「お前女子じゃなかったの!?!」
間違えられる性別

「これからよろしくな」
新しい友達

次回

「中学と遅刻と女子用制服」

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5703z/>

IS 歪んだ世界

2012年1月2日11時49分発行